

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	快樂主義に就て
Author(s)	富成, 喜馬平
Citation	龍南, 199: 33-44
Issue date	1926-11-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8868
Right	

快樂主義に就て

富 成 喜 馬 平

快樂主義と云ふ言葉を聞く時すぐ吾々の頭に浮んで來る聯想は、酒と女と歌とである。刹那的に官能的慾望を満足し追及する生活である。歡樂の影を追ふデカダンの生活である。

Let eat and drink for to-morrow we die !

事實快樂主義は一部の人々によつて、かくの如く解釋されて來たのである。試みに Epime と云ふ字を引いて見ると、a Greek philosopher, who taught that pleasure was the chief good, とあるのに何の不思議もないが、なほその下に次の様な註釋が付いてゐる。

one given to sensual enjoyment

one devoted to the luxuries of the table

之で見ると、エピキユアと云ふ言葉は丹治郎や食道樂と同義語である。少なくとも親類筋の言葉である。

所が、古代哲學史家である。デイオゲネス(Diogenes Laertius 恐らく、紀元後二世紀頃の人)の傳ふ所に依ると、當のエピクウルは「パンと水とさへあればツオイスも羨むには足らぬ。」と喝破してゐる。尙デイオゲネスは「快樂を全ゆる營爲シユウシユヰの終極目的とした男は、こんな人間であつた」と證言してゐる。エピクアとは食道樂の謂也と云ふ論者の言と比較して何と云ふ皮肉な對照であらう。「一體どちらが眞のエピクアなのだらう？」

ペイタアの名著「快樂主義者メイリアス」を讀んだことのある人は、一僧侶の子として生れ、豊かな古典の教養を享け、朝に入つては羅馬皇帝マアカス、オレリアスの秘書となり、終生娶らず、終に基督信者たるの懸疑を受け、その友コルネルアスを救はんが爲めに自ら人質となり、殉教者の様な悲痛な最後を遂げた、主人公メイリアスに、何故快樂主義者と云ふ形容詞が附けられるのであるかを不審に思はれたことであらう。メイリアスの様な人間が快樂主義者と云はれることが出来るのだらうか？メイリアスの生活には、何處がストイックのにほひがしやしないか？寧ろプラトニツクな面影がありはしないか？土居光知氏が「實感主義者メイリアス」と譯されたのも尤もなことであると思ふ。全く吾々に残された道は、快樂主義者と云ふ譯語を捨てるか、それともその内容を改めるかの二途より他にないのである。そこで吾々はまづその内容を點檢して見ようと思ふ。歴史の傳ふるエピクウルの説と、普通吾々の抱いてゐる快樂主義の概念との間には非常な懸隔があると思ふ。譯語の適不適は初づ彼の真相を明にした後に起る問題である。

二

エピクウル (Epikouros, 342—270B.C.) は342B.C.の末或は344の初めに、ギリシャ植民地サモス島に生れた。父はアテネ人で貧しい小學校教師であつた。十四歳の時學校でヘシオツドの天地創成論を讀んだが、萬物は渾沌から出たものであると云ふのを見て、それでは渾沌は一體何から出たものだらう？と云ふ疑問を起した。然し教師も彼を満足せしめる様な答をしてくれなかつたので、それから自分で思索をし初める様になつたと云ふ話が傳つてゐる。實際彼は自分でも云つてゐるように獨學者であつた。勿論彼の若い時分に、彼にデモクリツトやプラトオやアリストテレエスの哲學の手ほどきをしてやつた人々の名前が分つては居るが。十八歳の時彼はアテネを訪れた。そこで恐らくプラトオの弟子のクセノクラテエスの講義を聞たであらう。その當時アリストテレエスは無神論に禍されてカルキスに餘生を送つてゐた。その後彼は小アジア地方で教師をして居たが、³³³にはアテネに歸つてそこに學園を開いた。丁度ツエノオがその學園ストアを開いたのと、ほぼ同時代である。その學園は「エピクウルの學園」と呼ばれた。此學園には、「諸君、此處は諸君の意に適ふであらう。最高の善、快樂は此處にあります」と云ふ銘が

掲げられてあつた三ふことである。そこでエピクウルは誠に簡素な、節制ある生活を営んだ。學園に遊ぶ者はお互に魂の親しさをもち、あたかも平和な家庭に於ける様であつた。エピクウルとその學園に學ぶ者よりも、一層美しい一層純な共同生活の實例は全古代史を通して他に見出すことは出来はいとランゲは云つてゐる。その當時他の哲學者が普通やつた様に講義に對して一定の謝禮金^{サクラツ}を徴收することはしなかつた様である。自分初め他人一切の費用は、他の人達よりも一層惠まれてゐた特定の友人から享けてゐた。その學園には婦人も居れば白拍子^{ヘチエ}も居た。

こうしてエピクウルは三十六年の間その學園で教鞭を執り子弟の教導に従事した。BIOG. 彼は非常に苦しい病氣にとりつかれたが、確守不動の精神と晴朗な平靜とを以て堪え忍んだ。死が近づいた時彼は、その友人イドメノイスに送つた手紙にこう云つてゐる。「私の生涯を幸福に送つた後、今その終焉に直面して、私は次の事を貴方に書き送ります。私の肉體的苦痛は非常に大です。その大さには何者も及ばぬ程です。然しその苦痛も私の魂の平靜に依つて打ち勝つことが出来ます。その魂と云ふのは私に吾々の體驗と思索との回想を與へてくれます。」

一度アテネが包圍された時、エピクウルは、わづかしかない一日分の食料の分前を弟子達の間に分けてやつて、窮乏と困難に際して賢人は與へることの方が受けることよりもはるかに優つてゐることを了解する。何となれば彼は自分の分に安んずると云ふことに大なる價值を置くからである、と云つた。

彼は實に高貴な人格を持つてゐたにも拘らず、その説の誤解され易かつた爲めに、又その弟子の或者は事實はきゝちがへをしてゐた爲めに、その教敵ストアの人々から色々な嘲笑、罵倒、讒謗を受けた。然しディオゲネスは「此等の非難をする人達は皆な間違である。」と云つてゐる。尚彼は言葉を續けて、云ふには、「彼（エピクウル）の兩親に對する孝順、兄弟に對する慈愛、家僕に對する温情、一般の人々に對する愛、彼の簡素な生活法、敬神の念、祖國愛、此等は實に言語に絶するものである。只單に極端な謙讓の心から、彼は國家に對しては何等目覺しい仕事にたづさわらなかつた。その當時ギリシャは非常な國難に苦められて居たにも拘らず、彼は祖國に對する忠誠を守つて、よりよき生活を送ることが出来るように、何處か他處の國へ逃れて、祖

國を見殺にする様なことはしなかつた。」この非難に對する辯明が鍍金であるとは殆んど思へないとシュミットは云つてゐる。

エピクウルは非常に自信が強くて、世の所謂物議りを馬鹿にしてゐたらしい。彼にとつては、實際上役に立たぬ學問は三文の値打もなかつた。彼は自分の説を確信する所からそれを弟子に暗誦させた程である。彼は又その弟子に對して、諸君が私の説を徹底的に實行すれば、諸君は滅ぶ可き人間の間にあつて、神となることが出来ると云つてゐる。

之でエピクウルの人物の一斑が明かになつた事と思ふが世の所謂快樂主義者とは非常な隔りのあることが認められる。何處かストイックのほひがあり、プラトニツクの面影があると見ることは、決して根據のないことではない。その簡寂恬澹な、平靜溫和な生活は、吾が鎌倉武士乃至は禪僧を忍ばしむるものがあると思ふ。

三

政治に、經濟に、美術に、哲學に、最高頂に達したアテネの盛時も過ぎて、紀元前第五世紀の末葉になるとギリシャの政治的運命は漸く絶望的になつて來た。アリストテレエスは國家の救済になほ期待は持つてゐたが、第四世紀の末になると、ギリシャは最早救ふ事が出来ないといふのが一般の認識であつた。

此認識がこの期の二大學派同ちストアとエピクウルとの背景をなすものである。國家に希望を失つた彼等は、眼を個人に向けた。個人の救済解脱と云ふことが彼等の目的であつた。その方法は著しく異なつては居たが、幸福を外界の事物と無關係に、一個人の上に置くと云ふ點で彼等は一致してゐた。彼等の求めたのは、理論の哲學ではなくして生命の哲學であつた。従つて彼等の觀察は個人的、人本的、經驗的であつた。此點は極めて近代的彩色が強い。實用主義の原型はこゝにあつたと云はねばならぬ。此の傾向は殊にエピクウルの認識論に於て鮮かに現はれてゐる。彼の認識論は純粹な感覺論である。感官が全ゆる認識の起源である。感官による認識は直接確かなものであつて、それを信ずるには、それ以上何等の證明をも必要としないものである。全ゆる感覺知覺はそれ自身には常に眞である。只外界の事物との關係に於て、初めて誤謬が生ずる。例へば狂人^{フレンジニガバ}が龍を見たとき云ふ時その龍の像自身は眞である。然し此龍が彼を呑むだらうと信ずるならば、彼は誤りである。憶見^{メモリー}は眞なることもあり、

偽なることもある。若しそれが、感覺知覺によつて是認されるか、或は他の感覺知覺によつて、否定されることがなければ眞である。若しそれが如何なる感覺知覺によつても是認されないか、若しくは他の或る感覺知覺によつて否定されるならば、それは偽である。此の考方は近世科學の方法論と一致するものである。假説の眞偽を判定する標準が感官の證明に基くことを主張するものである。然し眞理の問題即ち普遍必然性の問題を如何に解釋するかと云ふ非難はまぬかれることができない。何となれば、感覺主義に従ふ時は、人間が萬物の尺度である。あると云ふことに就てはあると云ふことの、ないと云ふことについてはないと云ふことの。と云ふ個人的相對論に陥つて、普遍必然性を否定することになるからである。然し一方非常な長所を持つてゐる。即ち根柢のない推理を排斥して、確實な實驗の基礎を有すると云ふことが此の考方の特長である。形式的分析を拆けて、直接經驗の世界を有りのまゝに眺めて行くと云ふのが此の考方の本領である。吾々は從來餘りに緻密な分析に煩はされすぎて來た。形而上學の教へる所は、いかにも理論は精密で、分析はこまかで、系統的である。然し餘りに抽象的である爲めに、自分達には何等の情熱をも與へない。自分達に全體として作用するだけの力を持つてゐない。自分との巨離が餘りに大きすぎる。少しも自分の問題に觸れてゐない。これが哲學を無味乾燥ならしめた一の源因である。これが實用主義を生み、生命の哲學を出し、現象等を説えしめた理由であると思ふ。そこで吾々は、與へられた現實をそのまゝに眺めて見なければならぬ。如何なる偏見にもとられず、如何なる先入見をも持たず、自分自身の問題として世界を見返さねばならぬ。プラトオやカントは吾々を導いてくれる大燈明臺ではある。然しある時は、それが吾々の視野をさへざる障害物ともなり得る。如何なる聖哲と雖も全能の神に比す可きほどの者はなく、如何なる凡夫と雖も、彼れ自身の眞理が許されてゐる。灰色の煩はしい分析から解放されて、綠色の生々しい綜合に歸る運動である。固定した概念の世界から、自由な直觀の世界へ飛び出すことである。野の百合がソロモンの榮華にも勝つて美しいことを發見することである。價値の轉倒を行ふことである。このことは、エピクウルの最も重大な思想の一である。彼の快樂、幸福に就ての思想を理解する鍵論である。彼の倫理學を理解するためには、彼の認識論即ち眞理の流動的解釋を理解することが先行條件である。

エピクウルにとつては、哲學の目的は人生の幸福と云ふことにあつた。智識はそれ自身直接には何等の價值あるものではない。只吾々を實際上正しい行爲に導くが、或は正しい行爲の障害を取り除いてくれると云ふ意味に於てのみ價值がある。と彼は信じてゐた。それで彼は博識や文法學者の詮索や、歴史家達を輕視して、（彼自身博學の點に於ては甚だ缺けてゐた。）人々が、感官のとらわれない證明を、物識りのがらくたの爲めに臺なしにしなければ幸であると信じてゐた。彼は音樂や詩の理論をも非常につまらぬものだと言つた。上にも述べたように、彼の智識學は其自身の價值を有するものではなく、倫理學の階程としてのみ價值を有する。それでは、彼の倫理學はどうであつたらう？

四

智識學は人間の幸福の途上に横る偏見を取り除くものであり、倫理學は積極的に幸福の本質と幸福を獲得する方法を教へるものである。エピクウルの考によると、唯一の無條件的善は快樂であつて、唯一の無條件的惡は苦痛である。此命題の證明は殆んど必要である。何となれば此確信は吾々は自然によつて直接に與へられ、吾々の全ての行爲に決定的に豫想されて居るから。

さて快樂とは何であらうか？キケロ（Cicero I 63 BC）はギリシヤ語の *hedone* を譯して *voluptas* とし、精神の愉悅と肉體に於ける何か適意なものの柔かな刺戟を意味するものとした。然し之はエピクウルを完全に理解したものと云ふよりも寧ろ彼を誤解し易からしめたものである。エピクウルは吾々の慾望を三つに大別してゐる。第一は自然に具つたもので、それを缺けば生活が出来ないものである。第二は矢張り自然に具つたものではあるが、止むを得ない場合には缺ぐことを得るものである。之を満足することは吾々の幸福を益す所以であつて、強いて抑壓する必要のないものである。第三は人爲的に設けたものであつて、足ることを知つて、心の平靜を得る爲めには棄てねばならぬものである。

快樂と苦痛とは色々な種類と程度とがある。吾々が他の快樂を斷念するか、或はある苦痛を享けることによつてのみ、かち獲る種類の快樂がある。換言すれば吾々は他の苦痛を享受するか或はある種の快樂を放擲することによつてのみ或る種の苦痛を却けることが出来る。此の場合吾々は、快樂と苦痛のもたらす利害關係を頭に置いて、快樂と苦痛の感覺の程度を計量しなければ

ならない。そして變合によつては、善なるものも、惡であるかのように、惡なるものも善であるかのように取扱はねばならぬ。一つの快樂の後により大なる苦痛が潜んであるならば、その快樂は放擲されねばならぬ。又より大なる快樂を享受する爲めにはば或る種の苦痛は易んじて享けなければならぬ。そこで彼は次のような決論に到達した。全ゆる快樂の本質と目的は苦痛レ・マル・ツ・ロ・ジツのないと云ふこと、にある。即ち善とは惡より解放されると云ふことに他ならない。而して、この取捨選擇を行ふには理性的フ・エ・ア・ラ・フ・イ・ク・ア・イ・シ・ビ・トの智見が必要である。そこで彼は積極的享樂を敢て排斥はしないが、吾々は常に最高の享樂のためには智見の指圖に従はねばならないと教へた。そして積極的享樂と消極的苦痛よりの解放と、何れに重きを置いたかと云へばそれは後者である。即ち個々の快樂を出たとて勝負に満足することではなく、智見の指導に従つて全生涯を通じての平靜な状態を得ることが終局の目的である。即ち心の平靜ア・タ・ラ・ク・シ・ヤを得ることが終局の目的である。このアタラクシアを得た人が賢人と呼ばれる。それが彼の理想である。エピクウレニアと云へば酒と女と歌の追従者であるかの如く考へるのは非常な誤解である。彼は決して肉體的快樂を最高善と考へたのではない。それは粗笨幼稚なアリスチッポの快樂説である。アリスチッポの快樂は何等聯絡も組織もない、瞬間的官能的個人的な快樂の追及であつた。エピクウルに於けるような、永續的精神的全體的な快樂の體系ではなかつた。エピクウルにあつては、精神的快樂は肉體的快樂とは對等の關係に立つものではなく、上位の關係に立つものである。次元を異にしたものである。エピクウルはメノエコイスに與へた手紙に次のような辯明をしてゐる。「吾々の考では快樂が最高の善である。然しこゝに云ふ快樂とは、吾々を憎んだり誤解したりしてゐる一部の人々が信じてゐる様な、大酒飲みの快樂や、一般に肉體的快樂ではなくして、肉體は苦痛から、精神は不安から自由であると云ふことである。」實際エピクウルは非理性的に幸福であるよりも、理性的に不幸である方が遙かに優つてゐると考へた。精神的苦痛は肉體的苦痛より遙かに大きい。何となれば肉體の享ける苦痛は現在だけに止るが、精神の享ける苦痛は過去に溯り、未來に及ぶから。實に不幸な境遇にあつて幸福なりし日を回想するより大なる苦痛はない。同様に精神的快樂が肉體的快樂に優ることが云へる。それで彼の感覺主義は嚴密な意味の心理學的分析によつて得た感覺を主とするの謂ではなく、直觀や體驗を尊ぶ主義である。抽象的分析的立場から具體的綜合的立場にかへる見方である。

小さな幸福は偶然やつてくることがあるかも知れない。然し最大最高の幸福は理性的智見の指圖に従はねば獲られない。そこでエピクウルは、特に足るを知ること、節制と簡素な生活に慣れること、そして健康を保ち官能の刺激を濃潤に保つために、金のかゝる遊びや、いかもの食ひをさけることを忠告した。歡樂の悲哀を感じないものは人間ではない。歡樂は非常な魅力を持つてゐると同時に毒をも含んでゐる。又極度の刺激は吾々の官能を破壊するし、極端な禁慾は吾々の生命を奪ふ。人間は神と惡魔との中間者である。故に彼は節制と同時に中庸を説いてゐる。賢人は乞食や、大儒學者マキアヴェッリのような生活をするものではない。尙彼は妻子も人生の重荷の一と考へて結婚を否定し友情を以て最高の徳と考へた。又死は少しも恐るゝに足りないものだと思へた。何となれば、生は感官をまつて初めて生れ、感官の滅亡と共に滅ぶものである。所が吾々の生きてゐる間死は來ない。そうして死んでしまへば恐ろしいと云ふことはないからである。賢人はその友の爲めには喜んで死するものである。又場合によつては、自ら死を撰ぶこともある。

他の哲學者就中ストイカアが徳を最高善としたのに對して、エピクウルは徳は最高美乃至は快樂に達する方便であると思へた。徳そのものが吾々を幸福にしてくれるのではなくして、徳から生ずる快樂が吾々を幸福にしてくれるのである。然し誰でもが幸福になると云ふわけには行かぬ。それには素質と熟練とが必要である。而して一度この智見に到達した人は無限の幸福を享受することが出来る。

五

ストイチズムスにせよ、エピキュレイズムスにせよ、ギリシャの國家組織が破壊して、政治的没落の悲運に際して生れた思想であるから、理論的よりも實踐的、國家的よりも個人的に安心立命を求め、急激な外界の變遷に超越して一身の解脱を香からうとした點に於ては同一であつた。然しその方法は非常に趣を異にしてゐた。ストイカアが全慾望を滅却した狀態即ち不動心アパテイを理想としたのに反して、エピキュレイアは慾望の節制中庸により智見によつて獲られる心の平靜を理想とした。ストアのアパテイを全煩惱を滅去し盡して成佛しやうと云ふ小乘の涅槃觀に比すれば、エピクウルのアタクシイは煩惱即菩提、穢土即寂光淨土の

大乘の涅槃觀にも比せられる。慾望はストイカアの云ふ様に全く根絶される性質のものではない。人生全體の目的に適ふ様な正しい關係に持ち來まる可きものである。ストアの考方は餘りに峻嚴であり超人間的である。人性に對する見方が餘りに樂天的である。之に對してエピクウルの考方は凡天下根の考方ではあるが、それだけに吾々に親しい考方であり人本的な考方である。エピクウルの方が寧ろ有りの儘の人間の慾望の本質を把んでゐるのではあるまいか。慾望を正面から斷滅しようと思ふ考方を、慾望に對して正負二つの方向を持つ一次元的直線的退活法とすれば、エピクウルエピクウルの考方は二次元的平面的退活法である。遙かに自由な考方である。

エピクウルがアリスチッパの粗笨幼稚な快樂說から、隔段の進歩をしてゐることは明である。それは程度の差ではなくて性質的相違である。そこには越ゆることの出來ない渠溝がある。飛躍がある。彼が精神的快樂を肉體的快樂よりも上位に置き積極的慾望の満足よりも消極的苦痛の解放を終極的目的とし、大に節制中庸を説いた點は、寧ろ東洋的色彩が濃厚であると思ふ。就中老子の思想に於て著しい類似點を見出し得る。老子の本領は宇宙の本體に合一し、無我無心清虛無爲自然の狀態を得るにあつた彼は知足者富。と云ひ聖人欲レ不レ欲。不レ貴ニ難レ得之貨一。と云つてゐる。

知足者富。とは實に深い思想である。一見消極的退嬰的のようではあるが、その奥には無限の深淵が潜んでゐる。一體吾々はこのに對して固定した型にはまつた判斷をしたがる傾向がある。それは、思维の經濟と云ふような人性本具の根本的理由によるものであらう、然し一方その外殻を破つて常に創造し發展し、新しい世界を開拓して行く所に生命の本質はある。しかし事實として吾々は、偶然與へられた自分の環境を動きのとれないものと漠然乍ら決めてしまひ、その環境に適應した感覺知覺や判斷のみを撰び、之等に馴れ、其等を基礎として人生觀を立てたがる傾向がある。ここが大に問題だと思ふ。本當に自分の環境を知るために一應之を離れて見る必要がある。全て吾々が眞にものの價値を知るのは、そのものを失くした時に於てである。線の曲直と云ふことは之より一次元高い平面に對してのみ意味があり、面の凸凹は空間に對してのみ意味を有するように、吾々の環境の曲直凸凹を知るのには、之より一段高い立場に立つて見なければ分らない。吾々の環境に對して或る固定した概念を持つ

ことが誤謬の元である。かゝる考方からしては知足者富。と云ふ思想は到底理解されない。全ゆる先入見や固定概念を棄て、環境を流動的に見ることによつてのみ理解される。鄙俗な例ではあるが今一錢銅貨に對する價值と云ふことを考へて見よう。普通は誰もそれを問題にしない。極めて漠然とした微少な negligible very small の價值判斷しかしてゐない。殆んどそれすら意識してゐないかもしれない。しかし、もう一錢あれば錢湯に行くことが出来ると云ふ場合の一錢と、十圓の爲替を手にした時の一錢とにどれだけの違いがあることだらう。普通の環境を離れることによつて吾々は新しい一錢の價值を見出す。元來一錢の價值と云ふものは一定不變のものではない。吾々の環境に従ひ、吾々の價值判斷に従つて變化するものである。王様の食卓からこぼれ落ちるパン屑も乞食にとつては、もつたない程立派晩餐であり得る。

人生とは吾々が環境に對して行ふ價值判斷の系列であるとするならば、人生に於ける吾々の地位は整數的關係にあるのではなくして、分數的關係にあるとも考へられる。今與へられた環境を m とし、之に對する價值判斷を起させる慾求の度を n とすれば人生とは $\frac{m}{n}$ の無限級數の總和であると考へられる。 $\frac{m}{n}$ の價を大にするためには m を大にしてもよし、 n を小にしても同じ結果が得られる。 m を大にすることは吾々の自由には出来ないし、又それには相當した犠牲を要する。しかるに n を小にすることは或程度迄吾々の自由である。知足者の富み得る餘地はこゝにある。エビクウルの智見とは n を小にすることである。勿論これは極めて大ざつばな話であつて、 n を小にすると云つても、文字通り慾求を小にすると云ふ意味ではない。慾求を超越する意味である。慾求と次元を異にした一段高い立場に立つことである。そうすれば、吾々にそれ迄閉されてゐた世界が新に開けてくる。

新しい價值判斷を行ふことによつて新しい天地を見出す。慾求が自分の對象となつてゐる間は、吾々はどんな歡樂を享受しても満足するものではない。吾々は常により以上の歡樂を考へるからである。然し慾求と自分とが一體となつた時、即ち純粹に慾望と自分と融合した時、即ち自分が何かを欲してゐると云ふ感じがなくなつた時吾々はどんな歡樂に對してとも満足を感じる。その場合歡樂即ち對象の何であるかは問題にならない。煩惱即菩提、穢土即寂光淨土である。その尤も鄰近な一例は、遊戲である。勝りたいとか、負けるのが癪だとか云ふ不純な分子が全くななる位勝負が熱狂してくるか、或は第三者の位置にあつて利

害を超越して勝負事に没頭した場合、吾々は眞に満足の情を感じる。小供が將棋をさしてゐるのを見てゐると博物館を見てゐるより面白いことがある。優れた藝術家が宇宙間の全ての對象に美の世界を見出し、神に酔へる汎神論者が宇宙間の全ての對象に神を見出す如く、吾々は純粹慾望の世界に没入するとき宇宙間の全ての對象に眞の快樂の世界を見出すのである。故にエピクウルの立場は藝術的宗教的と云ふことが出来る。シユミツトの言によると、エピクウルにとつては何を食ひ何を飲むかと云ふことよりも、誰と食ひ誰と飲むかと云ふことの方が一層重大な問題であつた。何となれば友達なくしては生活は獅子や狼が餌を食つてゐるようなものだから。此の語法をそのまゝ借りると人間にとつては何を食ひ何を飲むかと云ふことよりも、如何に食ひ如何に飲むかと云ふことの方が一層重大な問題である。何となれば純粹慾望のない生活は荒涼たる原野のようなものであるから。と云ひたい。

エピクウルの慧眼はこの價值の轉倒、生の流動的、經驗的、綜合的見解にあつたと云はねばならぬ。これは實に智見の賜である。吾々に新しい視野を開いて、むさ苦しい袋小路から綠草の香の高い春の野に導いてくれるのが智見の本質である。故に智見とは分析的科學的の認識智ではなくして綜合的直觀的の達觀智である。

エピクウルの認識論は明かに、相對論である。然しそれだからと云つて直ぐに眞理の普遍必然性を彼から奪ひ去らうと云ふのは、眞理の作用と對象とを混同するものであり、就中彼の智見の思想を理解しないものである。彼の觀察の重心は眞理の作用にあつた。然し其を分析し抽象して行けば眞理自體と云ふ様な純粹對象の概念を得ることが出来る。元來作用と内容とは全然別な二物ではなく具體的一物の二面である。又倫理的相對論に陥つて、安價な華鉢的諦めにあまんじて惰眠をむさばる者があるとすれば、それもエピクウルを理解した者とは云へない。それは人生の最高善を求むる者とは云へない。それは實に人生で何が幸福であるかを知らないものである。どうして幸福を求めることが出来よう？。それは價值の轉倒を行ふものではなくて、價值の放擲を行ふものである。尙エピクウルの思想の極めて實踐的であつた事は一層東洋思想との類似點を見出さしめるが、然し極めて理論的で組織的分析的（東洋思想に比し）であつた點に於て彼は終に西洋の產物である。

實踐理性の純粹理性に對する優越を説き、精神の平靜の、慾望追及に對する上位を認めたエピクウルの教説こそは、快樂主義として最も精練されたものである。眞にエピクウルを理解するものはキレナイカアに非ずして、寧ろストイカアでありプラトニカアである。恐らくキリストも眞に彼を理解することが出来たであらう。勿論彼の説が完全だと云ふのではない。どんな學說であつても例外なしにどんな場合にも適用出来ると云ふものはない。それは人間の思想ではなくて神の思想である。エピクウルの説にも一定の限界を認む可きことは當然である。然しその限界を何處に置くかと云ふことは自ら別の問題である。

そこで吾々は、ペイタアがメイリアスと呼ぶに快樂主義者と云つた意味を理解することが出来ると思ふ。メイリアスは快樂主義者の一典型であり具象化である。吾々は譯語を變へることよりもその内容を變へることの方が一層必要であると思ふ。快樂主義に關する根據のない偏見や誤解をすて、正しい見解を持つことが必要である。

本稿を草するために参考した本は次の通りである。

- H. Schmidt : Epikurs Philosophie der Lebensende.
- Ed. Zeller : Die Philosophie der Griechen, III Teil, Ialt.
- A. Lange : Geschichte des Materialismus. 1 Buch.
- A. Schweigler : Geschichte der Philosophie.
- W. Pater : Marius the Epicurean.
- 大西 祝 : 西洋哲學史 上巻.
- 高橋武次郎 : 支那哲學史.
- 豊田 琢 : 實用主義の哲學.